

No. 1082

— 美 と 知 性 —

ミス東京 決まる

大東京祭協賛会、東京新聞主催、ミス東京コンテスト決選大会が9月28日、東京・日比谷公会堂で行なわれました。会場には四七士ならぬ47人の地区ミスが勢揃い、華やかな雰囲気にも包まれ審査が行なわれました。大東京祭の主役を務めるにふさわしい“美と知性”をそなえたミス東京は誰れか、それぞれ各地区を勝ち抜いてきただけにいづれ劣らぬ美人揃い、審査員は大弱りです。

右から左からそしてもっと近くから見てもらおうと、舞台を降りて大サービスです。慎重な審査の結果、二位に外丸佳代子さん(21)と谷口佳子さん(20)が決まり、晴れのミス東京に草柳文恵さん(20)が選ばれました。

10月1日都民の日、ミス東京は都内をパレード、東京の秋に彩りを添えました。ミス東京はこれから一年間、東京都のホステスとして立派に役目を果たすことでしょう。

狭山事件の「謎」

昭和38年埼玉県狭山市。5月1日、自転車で帰宅途中の女子高校生中田善枝さんが行方不明、自宅に身代金要求のキョウ迫状が舞い込むという事件が発生した。

警察は「吉展ちゃん事件」について身代金をとりにきた犯人をとりに逃すという大失態を演じた。5月4日、善枝さんは畑の中から死体で発見、5月23日、筆跡の類似、血液型の一致を理由に石川一雄(24)を容疑者として別件逮捕。

第一審判決で死刑を宣告された石川は、量刑不当で控訴、昭和39年9月第二審公判冒頭で犯行を否認、事件はふりだしにもどった。以後10年にわたり、80数回の公判が続けられ、自供と事実との間に多くのくいちがいがあると論議されてきた。

事件発生当時の新聞によれば、捜査当局は犯人複数説をとらえているが、なぜ単独犯にきりかえられたのか、重要参考人と思われる中田家の元作男の容疑が、本人の自殺によってたち消えとなっているのはなぜか。さらに、身代金をとりにきた茶畑の足跡は石川より2センチも小さかった。しかし、僅か十日後、奇妙にも足跡は一致と発表されたこの不自然さはなぜか、狭山事件の謎はつきない。

時計、カバン等の物証について、弁護士中山武敏さんは「捜査当局によって擬装された疑いが濃く証拠能力は完全に否定された」と語る。五年にわたり狭山事件の謎を追及、報道し続けている「週刊埼玉」亀井トム社長は、善枝さんの死体の頭部におかれていた玉石のナゾをこう指摘する。「犯人は流しの犯行とか、単墓制の一家の人ではなく、両墓制の弔いをよく知っている人がやったと推察される。石川が犯人ということはありえない」

石川の無実を叫ぶ「十万人大会」が開かれる中、第二審裁判は結審。その判決は10月31日下される。